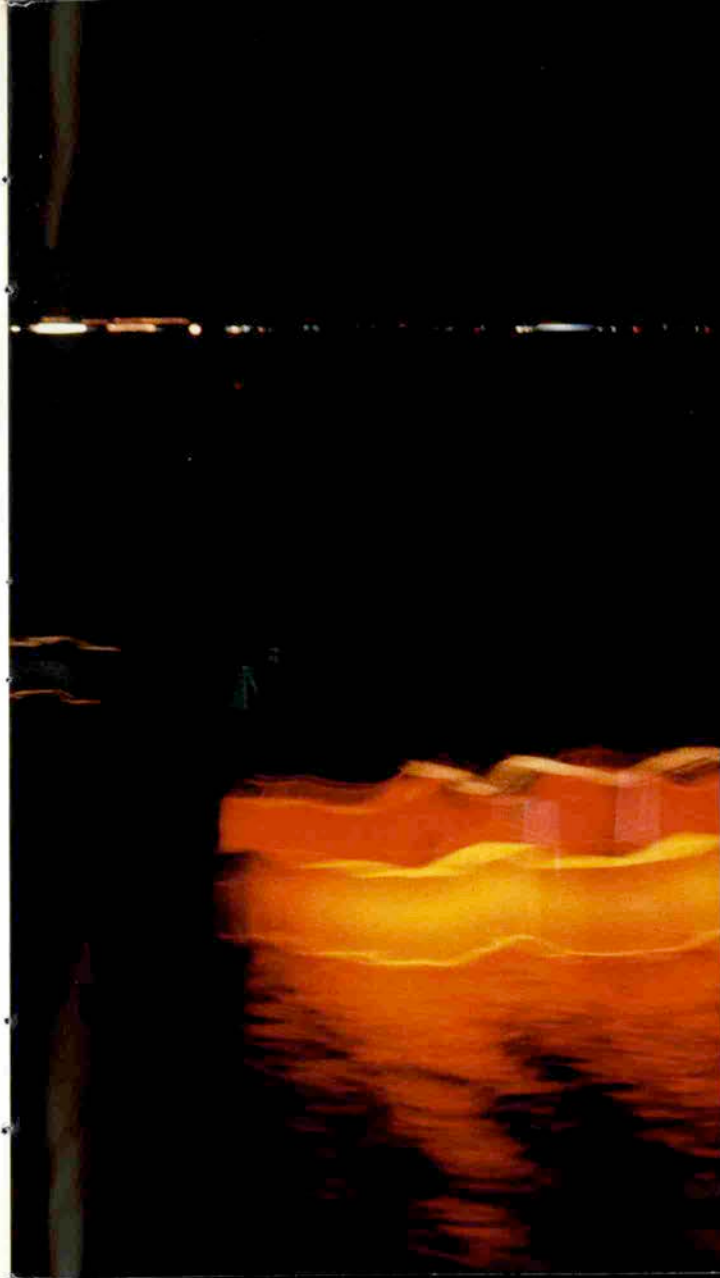
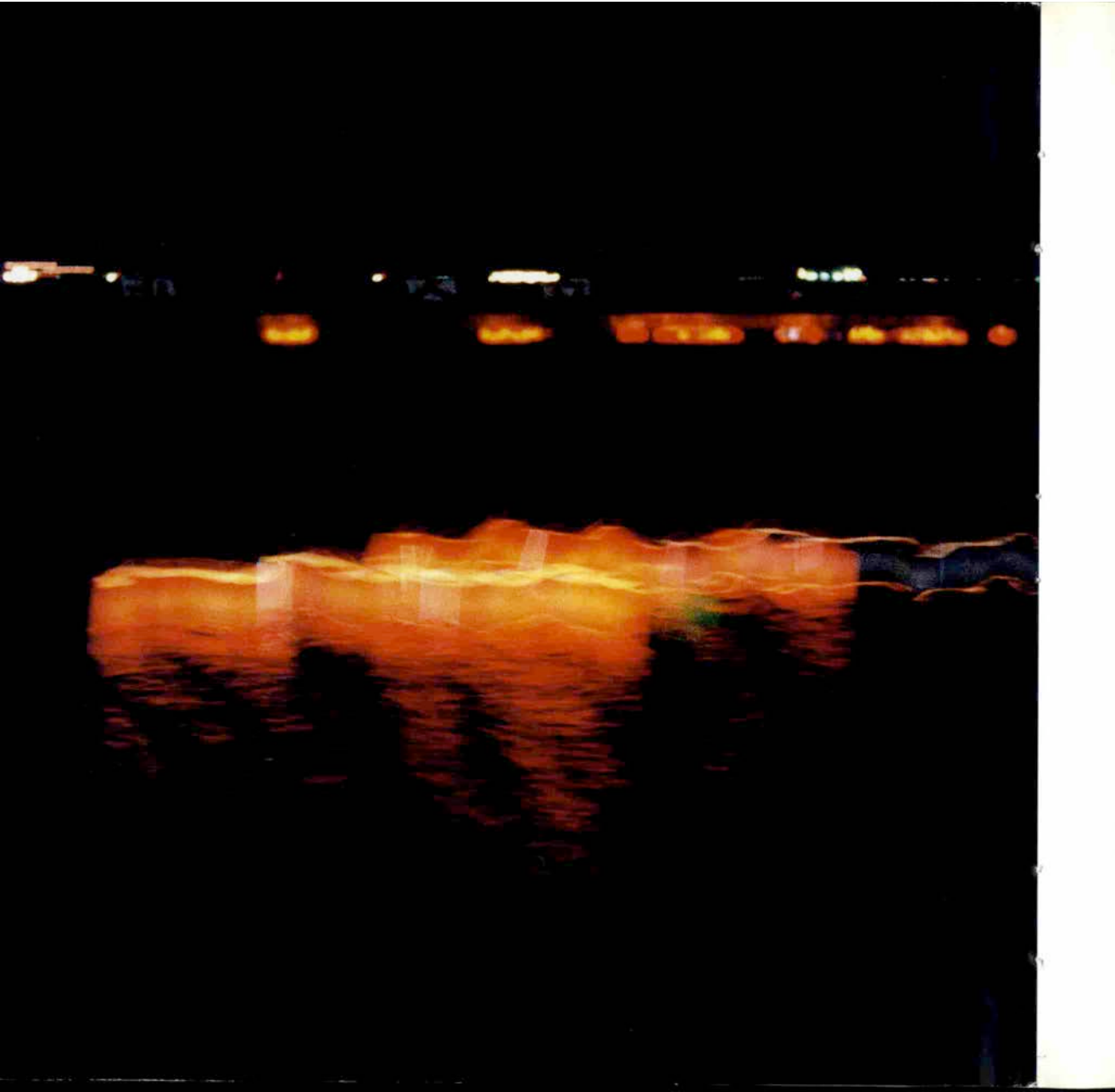


KOBE MONOGATARI

神戸の物語

緒方しげを NO・22





大輪の 花のように

3階ジバンシィ・ヌーベルブティック

美しいものに対する感覚は、時代とともに変化してゆきます。クラシックへ、レトロへと還ってゆく流れの中で、ただ懐かしさを追い求めるだけではなく、そこに鮮やかな主張を盛りこんだドレスが、女性たちのところをとらえます。葉かげに咲く大輪の花のように、ダイナミックに、生き生きと。コンクリートの秋の街に、そのみずみずしさがほとばしります。ジバンシィのエlegance—新鮮な感動がいま、ここに。

●ドレス(毛100%).....160,000円



DAIMARU KOBE

電話(078)331-8121



新しいのに、懐かしい。

ANNIVERSARY
270
創業270年

海に見える白いチャペルでウェディング。

御結婚披露宴・

各種パーティー

好評予約受付中



海を見ながら、神戸ならではのファッションブルなブライダルは、恋人たちの夢。
白亜のチャペルに続くホールでのご披露宴や、劇場を利用した世界で初めての
シアターウェディングなど、感動的シーンの演出を心がけています。
カリヨンの音色に祝福されて、慶びもいよいよクライマックスに――。

ゴーフル ポートピア88
神戸 風月堂 港島

〒650 神戸市中央区港島中町7-2-2

☎(078)302-5555

本社／〒650 神戸市中央区元町通3丁目3番10号 ☎(078)321-5555

ゴーフル ポートピア88
ポートライナー中埠頭駅前
(ゴーフル白いチャペル前)



これは神戸を愛する人々の雑誌です
 あなたのかぐらに楽しい夢をおくる
 神戸を訪れる人にはやさしい道しるべ
 これは神戸っ子の心の手帖です

10月号目次 ● 1987・No.317

表紙／小磯良平

セカンドカバ／中西勝

9 神戸っ子87／河西直子・中島正義

12 ある集い／ミナト神戸っ子の会・神戸女声合唱団

15 コウベスナップ／さらば旧神戸商工会議所ビル

16 美の小箱／10井沢以佐子／文・赤根和生

18 神戸の物語／カメラ・緒方しげを

29 わたしの意見／中内守

31 随想／原口清志・中康弘通・足立直哉

35 地域文化論／米花穂

36 連載エッセイ／安水絵和・カット／中西勝

38 K O B E 音楽夜話30／岡本一郎

42 珈琲飲みながら／大月雄二郎

44 キャンペーン座談会／六甲アイランドシティー

50 (特集Ⅰ)ファッション都市神戸へのメッセージ

水野正夫・立尾長三

56 (特集Ⅱ)アパレル社長インタビュー(PartⅡ)

経済ポケットジャーナル

64 (特集Ⅲ)K O B E ファッションスケッチ

63 篠原順子・小笠原尊子・浦野年彦

72 ブロフェッサーPの研究室／岡田淳

74 話題のひろば／井植文化賞表彰式・神戸オリエンタルホテル新装記念パーティ

76 K O B E ファッションスポット

84 ファッションウォッチング／高野多美

86 神戸のお嬢さん／岡田文子・上田以津美

88 もうさんのHYOGO WALK58／丹波煥多紀郡今田町

118 動物園飼育日記(38)／亀井一成

122 小山乃里子の華麗なる男のインタビュー／濱田成夫

126 スポーツエッセイ／今井啓介

128 兵庫県立近代美術館／小出樽重展

129 クロスオーバーK O B E／韓国特集

134 神戸を福祉の街に／橋本明

136 有馬歳時記

144 出会いの旅／竹内江明

146 シネマ試写室／淀川長治

150 ポケットジャーナル

154 神戸発見10／奮電一／山から海へ、秋は風につて

158 連載小説／「五ツ松福来うらやみ通り」

180 山西史子 カット／小西保文

182 神戸ハイカラ文化史 ⑧／鈴木正幸・鈴木正幸

カメラ／米田定蔵・池田年夫・松原卓也

海船港／かどもとみのる

第11回 rose garden ローズガーデン美術展

1987年11月29日(日) — 12月6日(日) AM11:00—PM6:00 12月8日(日)はPM5:00迄

■会場 *Rose Garden*
FOR THE NISHIO URBAN CLUB

■テーマ 無題 ■搬入日 11月15日(日) AM11:00—PM7:00

■出品料 1点 3,000円

■審査員 赤根和生 伊藤 誠 泉 茂 小泉康夫 小林陸一郎 佐藤 康
西村 功 服部 正 元永定正 弓倉恒男 (アイウエオ順)

■ローズガーデン大賞 賞金20万円

■奨励賞 北野商業連合賞 賞金 5万円

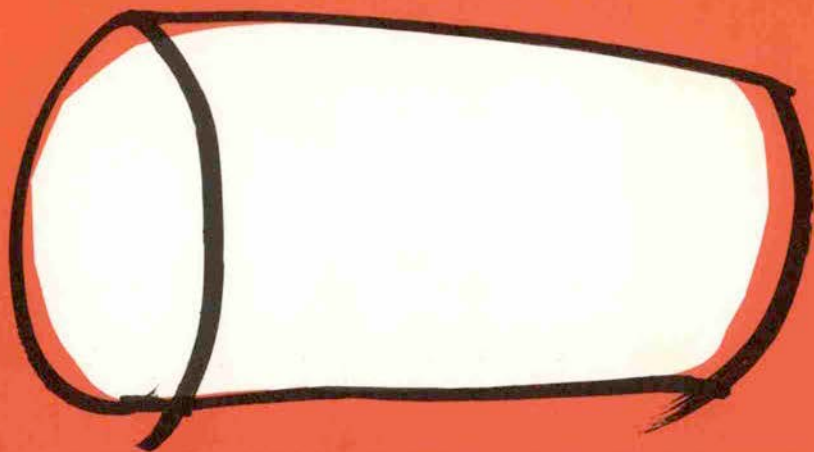
■佳作 2点 (財)神戸市民文化振興財団賞 賞金 3万円

■元町画廊賞 神戸っ子賞

■主催 ローズガーデン美術公募展実行委員会

■協賛 北野商業連合(KAM) (財)神戸市民文化振興財団
月刊神戸っ子 元町画廊

■事務局 ギャラリードラベ 神戸市中央区山本通2-8-15 Call 078-222-1518





感性のステージ
ファッションパーク。

新宿・高野

BONFUKAYA

ゲルラン

ココ山岡

VICKY

LEE SOPHY

ELLE

ブライダルサロン・ループル

ダイアナ

サイズショップ・ダイアナ

OFU

CLAUDE LEMA

ZAZIE

三愛

FASHION PARK

神戸・三宮さんプラザ センタープラザ3F

営業時間—am11:00—pm8:00
PHONE—078/3321698



JACKET(santa fe) ¥56,000 PANTS ¥18,000 TIE ¥11,000

週末
とっておきのジャケット
とっておきの時間



JACKET(santa fe) ¥56,000 TIE ¥9,000



本部/中央区三宮町1丁目6-22(ニューセンター7F) (078) 392-1651

三宮本店/三宮センター街 (078) 391-0895
 プレザージュ/トアロード (078) 391-0896
 ドルチェマック/三宮センター街 (078) 332-0141

京都店/藤井大丸2F (075) 211-0857
 姫路店/FESTA 2, 3F (0792) 89-4738
 宝塚店/宝塚南口サンビオラ3F (0797) 71-4830

☆私の意見

神戸を 大人の機能の ある街に

中内 守

△サンテレビ代表取締役社長▽



私は流通業界から畑違いの放送業界に入りました。経営という面からみれば、どちらも大差はないと思います。しかし、これまでの「モノ」中心の世界と異なり、放送業界は、文化性の高い「感性」の世界です。地域マスコミとして、多くの視聴者に愛される番組づくりや、放送局としての使命をはたしていけるように、気持も新たに頑張っているところです。

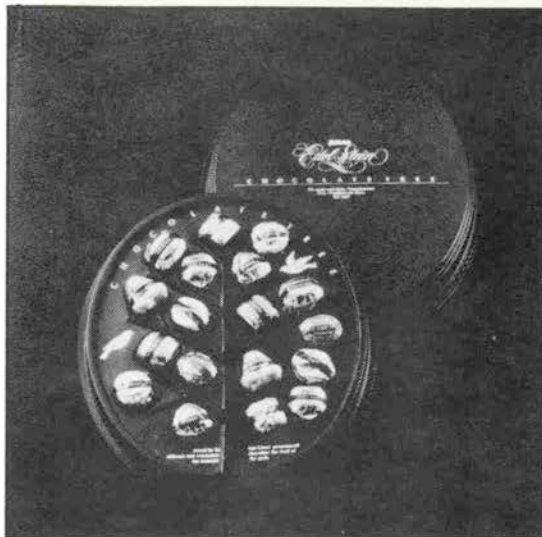
神戸は、他の街にはないミナトや、キラキラした美しい街づくりが誇りです。次つぎに新しいものを生み出し、てはいきますが、伝統という面ではいまひとつの感じがします。これからは、何がポイントなのかよく考え、全体をまとめていけるような、文化の核づくりみたいなものがなくてはならないかと思っています。もちろん、神戸っ子の開放的で自由に発想をしていく基盤の上に立ってのことです。

神戸には、サンバからジャズ、シャンソンなど、何でもこだわらず、いいと思えばどんどん取り入れていく「幅のある開かれた心」があります。だからこそ、テストマーケティングにふさわしい街ということにもなるのですが、ややまとめてモノにしていくパワーは不足しているように思うのです。

これからは港町として受け入れた文化を、しっかりと根を広げていく作業が必要でないでしょうか。

ファッション都市としてのパワーは、大分まとまって来ましたが、中型コンベンション都市として、情報生活が活性化する、大人の集まる場所。大人の機能のある街に成長してもらいたいですね。そのための協力はおしまないつもりです。

街も七時位で終るのでなく、夜を楽しむ。ジョギングなどスポーツも夜にやるといった、夜、個性的な場をつくって、もっと二十四時間を生き生きとした神戸の街にすることが、大型集客産業に継がって行くと思います。私も神戸生まれの神戸育ち。何でも取り込んで、何でもやるという神戸型人間なので、マルチ的な現代に相応しい、大人の情報文化を育んで行きたいと考えています。



—新しいチョコレートの夢—
チョコレートツリー

C H O C O L A T E T R E E

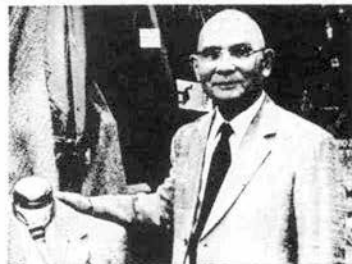
大人の贅沢としての本物のチョコレート。
9種類のファンシーチョコレートをツリー
の形に詰め合せた、おしゃれなギフトです。

¥600(7個)・¥1,000(12個)
¥1,500(18個)・¥2,000(24個)・¥3,000(36個)



ユ-ハイム

ハイセンスな紳士服で
最高のおしゃれを



三恵洋服店

神戸・元町4丁目 ☎(078) 341-7290

漫画家というのは因業因果な商売で、他の同業者に聞いてみても大抵の感想が、大同小異の「ヤクザな稼業」を自認しているようですが。

ま、自宅をそのまま仕事場に行っている場合が圧倒的に多いのだから、通勤なし。服装かまわず。寝食。入浴。トイレ、瞑想は時を選ばず、自分の都合次第。TVをぼけらっ

原口さんの女性キャラクターたち



らはズレてしまった生活感覚しか持っていないのは確かですよね。まるで子供。

そうした「ぐうたら」な性分の人間でも、この世界で最初の足場を固めるには、とにかくにも上京してガムシヤラにやらなきゃならん時期というのがあるものなんです。が、僕が未だに上京もせずに、神戸在住で東京の出版社相手

と眺めるのも仕事。執筆の参考資料と称しては、モデルガンやプラモデルを買い漁って、そのまま一日遊び呆けてしまったり。と、およそいい加減な暮らしをしているなあ。と。自分でも思ってしまうのだから困ったものです。少なくとも所帯に責任を持たない独身者の場合は、はっきり言って相当、世間の一般常識か

■随想三題

「神戸」
出るべきか、否か

原口 清志
(マンガ家)



の仕事をごなせているのは、なんとなく地方にいるままデビュー出来てしまったし、その後の仕事も、食えるだけの「その程度の仕事量」で現在納まっているからというのが理由なんだけど。この我が土地が、やっぱり神戸だからというのも一因ではあります。う。僕の描く漫画の舞台は、神戸と近畿圏を常に想定した

ものばかりです。思えばのどかなものです。

街で見かける健康そうなお嬢さん達が、そのまま作品の中の背景に登場します。町並はオシャレで、いつも何か新しさどこかしら懐かしいようなニオイがするのです。

考えてみれば、自分の好きなもの、愛しているものへの思いいれを商売のネタの一部に織りまぜながら、今のところ「売れっ子」になれない不幸に頭を掻きつつ趣味と実益の手作業で毎日を過ごす…。

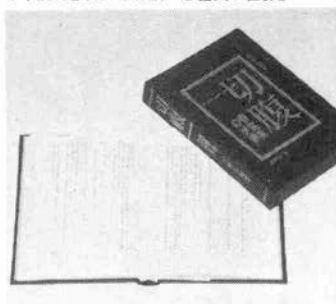
実は「神戸」を出るキッカケと必要に迫られないまま、ずーっと呑気に漫画家をやっているのは、外に飛び出す事を暗に拒否し続けている自分自身にも責任があるのかもしれない。「神戸生まれ」の「神戸育ち」でありますから、つまり他所の水を知らないわけで。他県の住人になつたりした「元神戸人」である友人の話などを聞くと、「神戸」の「神戸らしさ」というものは、外に出てみて初めて理解するとの事。…となれば、神戸しか知らないのも問題でしょうか？

大正十四年須磨生まれ須磨

育ちの神戸っ子。西須磨小、神戸三中、兵庫医専と進み、昭和二十年一月肋膜炎、六月戦災で京都へ疎開、戦後退学で神戸と地縁が断たれた。

十九年春に日赤へ征った初恋の少女も還らず、人の縁も切れかけた。少女は、十八年秋深い空地での立話で「もし敗けたらウチ切腹するワ」

今年復刻された「切腹・悲愴美の世界」



音と輝きは、四十四年経た今も鮮かである。十五年前に社用で三宮出張の帰途を須磨へ廻り道してみたが、その空地は跡形もなく、家が建てづまっていた。喉には少女が佇ち草生があったが。

二十年十二月GHQのハラキリ禁演を契機に、私は切腹の歴史・文芸・芸能の研究著述と小説を青春の少女への永

「じゃあばくも一緒に腹を切ろう」

「ウチはみなし児やからええけど、弘さんは一人子やしご両親もあるし、そんなことさせられへん」「信ちゃんはいやへん世の中に生きてても仕様がな」「ウチ死んでも幸せかも知れんなあ」と秋の陽に透明な涙をこぼした。共に十八歳。草むらを跳び立ったキチキチバッタの翅

■随想三題

望郷・わが神戸

中康

弘通
(作家)



遠に届かぬ恋文のように、療養中から勤め娶り子育ての間も書き続けた。三十五年初版の第一著「切腹・悲愴美の世界」が、四十六年三島由紀夫の取材来訪の思い出と追悼を増補再刊、今年は上製函入で国書刊行会から復刻された。往年愛読していた神戸新聞さんが、海の記念日に書評して下さいたのはよろこびであっ

た。昨年四月岡田有希子自殺の話題で、月末退社予定の女子社員に、「十八歳で死ぬこと何とも思っていないからな」「えーッ、わたし十八のときそんなこと考えてませんよ」それからの思い出話の末、「もういつ信子のところへ行ってもいい」そう私は云ってしまった。彼女の退社ほどなく心筋梗塞で私が倒れると、山陰線で一時間余の町から京都市内の病院まで来てくれた彼女は、「働けない男が生きてても仕方がない」と云う私に、「むかし泣かせた人のことは、もう忘れて下さいね」と釘を刺して帰って行った。私の一言を覚えていてくれたのであった。須磨での少女との青春に戻れぬ以上、もと同僚として諫めてくれた彼女の友情に蘇った私は、少女を心に生かして生き続ける。そして切腹に関わる個人誌「櫻」続刊で神戸への望郷の思いをつなぎ続けたい

「噴水のきらめきのなか幻は白衣の少女・わが棲みし街」「故里の風は海より背を押して過去も夕陽もゆらめきのなか」

(東遊園地)

私は一介の大学生であり、路上観察を趣味とする者である。そして一市民として旧商工会議所ビルの保存運動に携わって来た。それは、神戸という都市の面白味を守る為であり、自分にとって一番好きな街が、無個性なミニ東京と化して行くのを見ていられなかったからである。

神戸「らしさ」とは何ぞや。

ビル保存のライトアップとジャズ演奏



いっても私に悲壮感はない。肩肘張って使命感に燃えてもしょうがない。そんな態度は思ひ上がりに過ぎないからである。私は常に「楽しみながら」をモットーにしている。自分が楽しくないことが、人の共感を呼ぶ訳が無い。政治運動ではなく感性の問題であるから、「やりたいからやる」のでなければ続かないであろう。

それは港町のハイカラさであり古き良きモダンビズムの香りである。然るにその「らしさ」が最も残る地域の内、北野は俗化し観光地と化してしまい旧居留地はその存在が無視され、地上から消え去ろうとしている。何とか今の内にブレイキを掛けないと取り返しのつかないことになると思い、行動してきたのである。とは

■随想三題

小人閑居して……

足立 直哉

《学生》



う、と思うからである。

この歴史的蓄積の価値を認めない人々の文化的後進性をただ非難するのではなく、市民を啓蒙することによってそれを克服して行くような運動が必要なのである。

そして様々な活動を行なってきた。シンポジウムに始まり、署名、ポートウォッチング、再利用企画コンペ、その

展覧会、地蔵盆の精霊流しとライトアップ、そして告別式（私が牧師を勤めた）である。仏教の行事の後で基督教の儀式とは、一見無節操極まりない。しかしこれが「遊び心」なのであり、楽しむとはこういうことなのだ。実際こうやって様々な運動をしていると、市民の反応が確かな手答えとして伝わってくる。多数の市民が行政主動の金儲け一点張りのスクラップ・アンド・ビルドに対して、「ノー」の叫びを挙げ始めている。

残念ながらこの旧商工会議所ビルディングは負けてしまい倚松庵も事実上負けた（移転など何の意味もない）。しかし確かに情勢は代わりつつある。我々の戦いは無駄ではなかったようだ。行政も何時迄も市民の声を無視出来る訳がない。皆が声を挙げれば必ずやこの街は守れるのだ。いや、我々が守らずして誰が守るのだ。

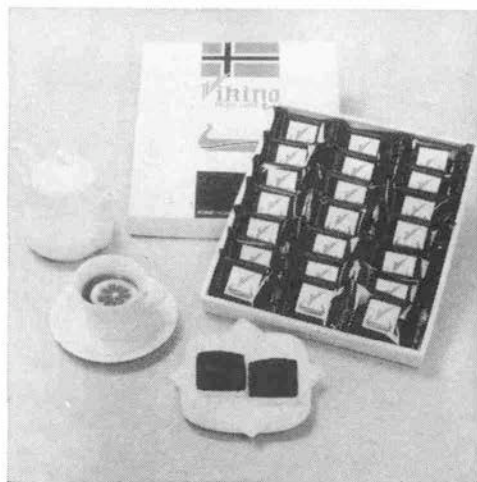
読者諸氏よ、謙譲の美德など通じぬ世。願わくば愛する神戸の為に何事か為されむことを。声を出し立ち上がらむことを。

新発売



フルーツケーキ

ヴァイキング



洋酒の香り豊かな
フルーツ&ナッツをブレンドしました。

14ヶ入¥1000 12ヶ入¥1500 28ヶ入¥2000

— 北 欧 の 銘 菓 —
2-ハイム・コンフェクト

こんにちは赤ちゃん



青笹有里ちゃん／芦屋市楠町
「寝る子は育つ」スクスク元気に
成長しました。

完全看護★冷暖房完備★病院前公共駐車場有

芦屋 柿沼産婦人科



芦屋市大柁町1番18号

芦屋保健所東隣

☎ 芦屋 (0797) 31-1234 代表

あわじ西淡町の 松原サミット

米花

稔 八神戸大学名誉教授・福山大学教授

小さなまちの創造的試みが広域のための情報発信の役割を果し、それが大きく育とうとしている事例を、町制三〇周年記念の人口一万四千の西淡町開催の松原サミット（松原友好市町交流会議）に思ふのである。

「慶野松原」をもつ西淡町は、山口昭明町長の発想で、白砂青松の市町の首長が一堂に会し、まちづくりのなかでこれを二一世紀にむけて保存することを語りあうことを期したのである。大鳴門橋で地続きになった緑で、対岸香川県「津田の松原」の津田町長、高知県の足摺岬に近い「入野松原」の大方町長に話しかけ、そして日

本海側福井県の「気比の松原」の敦賀市長、太平洋岸静岡県の「三保の松原」の清水市長の参加を得、他に一、二働きかけたものにとりあえずこの二市三町の交流会議となった。

西淡ふるさと祭りの翌日昭和六二年七月二七日午後中央公民館で三百名の一般参加で始まる。まず京大名誉教授岡崎文彬氏の基調講演「緑の美学」で、自然の代表としての緑のたえざる養生管理の重要性が指摘された。ついで筆者がコーディネートとなって五市町長の会談となる。最近の環境激動でそれぞれの市町のまちづくりのきびしさのなかで、その松原の特有

の歴史から現状の披露があり、当面する課題として松喰虫被害と対策、蟻もいなくなった土の再生、観光客によるゴミ対策とそのためブルドーザー開発、国有林の地元管理の難しさの指摘など、結局は地域を愛する子供から高齢者までの協力と自治体責任の積極的とりくみこそ鍵であるとされた。アドバイザーの奈良女子大学教授近藤公夫氏から、松原こそ人間の文化と自然環境との接点で綿密な管理の必要がのべられた。これからの毎年の開催、敦賀市長高木孝一氏から来年一〇月主催の旨挨拶、最後に各地域の松原の特性を生かし生きがいあるふるさとづくりを目指すという共同宣言で会議を閉じた。

付言すれば、当日午前の五市町長のみの打合会は文字通りサミットとなつて、管理上の国と地元の関係の難しさなどほんねの話し、この会議の形式的拡大より若干の新規加入を加えて実効ある討議を続けたいことなど申合せた。

また後援団体の（社）日本の松の緑を守る会（会長稲山嘉寛氏）の会場ロビーの松喰虫防除のパネルも興味深かった。それにしても小さい西淡町当局職員ではじめての交流会議を企画しとどこおりに成功裡に運営できたことに心から敬意を表したいのである。



上／慶野松原（西淡町）を歩く
下／「松原サミット」パネルディスカッションの様子

随想

旅のかたち

〔10〕

村へ

安水稔和

絵／中西勝

八月。

仁豊野の駅で降りて市川を渡ると父の村である。夏の陽に晒された白いまぶしい村。そのはずれの田の連なりのむこうにひとにぎりの墓地がある。北のはずれに紅い百日紅が、南のはずれに白い百日紅が、墓所をはさんで向きあって風に吹かれている。記憶どおりに色鮮やかに咲き乱れている。

一昨年の夏、父の骨を墓下に納めたとき、どうしたとか、紅い花の木が半ば枯れかけていた。まばらなちじれた葉のあいだからわずかの紅がのぞいていた。昨年の夏、花は増えたが枯枝が目についていた。今年はどうか。遠くからではわからないが、近づくとはやり、もとどおりとはいえないようだ。それでも精いっぱい花をつけている。白い花の木に負けじと紅い花をこぼしている。

墓地のすこし先に福崎へ通じる高速道路がつくられて、以前は山すそまでたどれた視線をさえぎっている。鳥の声を圧する車の音。そのむこうの山かげから今流行のなんとかパークの大観覧車が上半身をのぞかせている。村から南への一望の田の広がり、今は小工場がたち小住宅がたち、姫

路へ通じる谷の美しいせばまりがもはや見通せなくなっている。

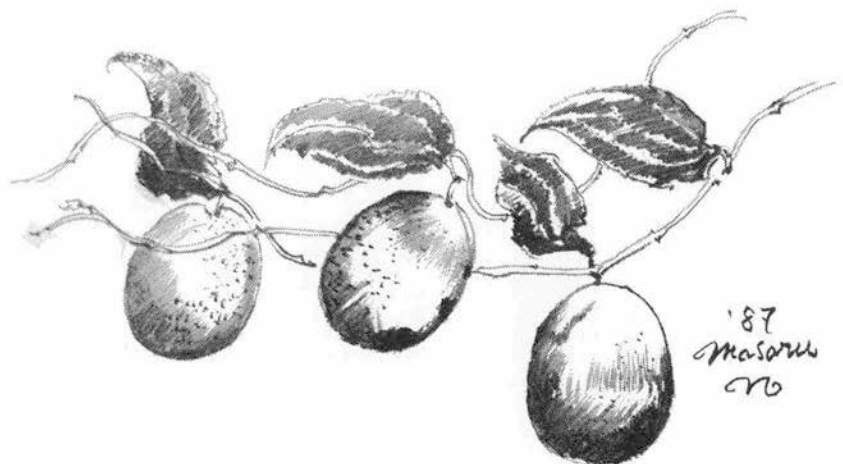
村は変わった。だからこそというか。田の畦のむこうに紅い花の木・白い花の木、二本の木が向きあって立って風に吹かれているのを望むとき、父の村へ来たのだとおもう。

九月。

何年ぶりだろうか。墓参がしたいという母と出かけた。竜野から西へまっすぐ、坂ひとつ越えると母の村である。山ぎわにわずかの家の点在する山あいの小さな村。

坂を越えて村に入る手前、坂下に池があり、カイツブリ、ヒシの実。その池の土手を伝って山に入ると、火葬場があった。林間に切り開かれたわずかの空地に丸太を組んでその上に棺桶を置く。火をつけていったん家に戻る。縁側に腰かけて立ちのぼる煙を見つめていた。母の父の死。あれは何年前のことだったか。(今は坂むこうの市の施設が使われている)。火葬場から細い急な山道を登っていくと、村を見下す小山の頂きに着く。そこが墓地であった。

今年行ってみて驚いた。池のあたりから池を踏みつぶして山をドンと抜いて新しい道路がつくられていた。歩道がついていて街路樹が植わっていて街なかのようで通行人のまったくいない明かるい広い車の道が出現していた。左に火葬場とおぼしき茂み。白く光っているのは六地藏らしい。右に孤立した小山。小山の切断面に急傾斜のコンクリート道がつけられていて、母に登れるだろうか、



手すりを握り、息を切らして、やっと登りきると墓地。墓前に立ち、あたりを見まわすと、まわりの木々がすっかりのびて大きくなって、見えるはずの村が見えない。

母の生家は無人である。街道から見るたたずまいは昔の面影をとどめているが、近づくといかにも無住無人の家である。六月の空襲で神戸を焼け出されて転がりこんでから戦後の数年間、神戸へ戻るまでここで暮らしていた。今は壁が落ち、ツタが瓦を押しあげ、雑木が茂りに茂って、私たちのいた離れはうかがいようもない。

裏の池をまわって山のほうへ歩いていくと、畑のきわに見おぼえのある木が見える。ナツメの木ではないか。秋口、風の吹いた次の朝、木のしたにたくさんの実が落ちた。熟れた白い表皮がひび割れて茶褐色の筋が入ったのを拾って食べた。甘酸っぱかった。ズボンのポケットにつめこんで、朝露の草の道を歩き歩きたべたものだ。

近づいて見るとやはりナツメの木だ。記憶ではもうすこし畑の奥にあったようにもおもいうのだが、なにしろ三十年もまえのことだ。拾って食べてみる。垂れた枝からちぎってたべてみる。あの味ではない。甘くも酸っぱくもない。味もそっくもないカサカサとした舌ざわり。それでもいくつかがポケットに入れてみた。ふくらんだポケット。手をつつこんで握ってみる。

人は動く。木といえども動く。山さえ動く。すべてが移ろってしまつて、それでも動かないものがあるとすれば、それはなにか。ナツメ、ナツメ、ナツメの実五つばかり握りしめて、乾いた固い道を戻る。

白馬と エリック・サティと 坂本龍一と

岡本一郎／ダンススリー・ルネッサンス合奏団主宰

夏の野外演奏会は雨さえふらなければとても気持がよい。特に白馬野外音楽祭のように、桁はずれに大きく、そして美しい大自然環境の中で、いささか不自然ながら人工音響の助けをかりて演奏するのは、夏休み特有の遊び半分精神もからみ合って仲々興味深いものだ。

今年の8月始め約2週間にわたり長野県北安曇郡白馬村岩岳で国際映画祭が催され、その中のイヴェントの一つとして野外音楽祭が企画された。私の主宰する「ダンスリー・ルネッサンス合奏団」がここに招待される光栄に浴したのだが、ロックやニューミュージック、フォークの世界の人達ならともかく、普段クラシック音楽の会場ばかりで演奏しなれている私達にとってはこうした大自然のバノラマの一角で演奏するというのは大変貴重な、そして一寸狂気じみた体験だった。白馬村岩岳の村はズレに特設された2大ステージは（進行をスムーズにするために舞台は隣り合わせに二つ設けられた）下の芝生に坐っているお客さんから見ると、100個の巨大なスピーカーに取り囲まれた、右に白い舞台、左に黒い舞台の二つの異様な人工空間にすぎないのだが、ステージの上に乗っかっている我々から逆に客席を見ると、そこにはたまたえようもなく美しい北アルプスの一大景観が震さえ出なかつたら、くり上げられていたのだから。雪をいただいた白馬岳、常念、鹿島槍といった三千メートル近い山々を背景に取り入れたこの客席の美しさは信州での野外演奏会ならではのものである。

出演団体というか、出演バンドは全部で六つ、クラシック系のバンドは私共ダンススリーのみ、関西から招かれたのもダンスリーだけだった。他のバンドは全て東京からで、ライブハウスや深夜テレビを活躍の場にしている、こりない面々である。不聞にして私共の存じあげていないアメリカからのアーティストも何人かいらっしやっていた。

最近の新造語でニュー・エイジ・ミュージックというカタカナ横文字をご存知の方も多いと思うが、各レコード会社からこのニュー・エイジ・ミュージック・カテゴリーに登録され、この新造語が発売CD・LPレコードのどこかに明記されている演奏団体のみがこの野外音楽祭への参加対象に選ばれたらしいのである。私共ダンスリーは過去に6枚のLPをリリースしているが、関西のURCから出た最初の2枚組のLPアルバム以外は全て日本コロムビア・デンオンから出ている。昨年の11月に発売された一番新しいCD・LPではフランス近代音楽の奇才エリック・サティの作品ばかりを取り上げて古楽器と歌に編曲し一枚のアルバムにした。このアルバムがいわゆるニュー・エイジ・ミュージック盤なのである。

作曲家ジョン・ケージが旗頭となって現代音楽の世界にチャンス・オペレーションの波を起こしたのはもうかなり古いことになるのだが、サティはそのジョン・ケージに先がけること更に50年の昔にこのチャンス・オペレーションの音楽や環境音楽に先鞭をつけたきわめて前衛



的な作曲家としての一面がよく知られているが、彼の本質はむしろその反対の面だった。ドビリシーはサティを評して「現代にまぎれこんだ気のやさしい中世の吟遊詩



ある日の演奏風景

人」と言ったように非常に単純で、神秘的で静かで、エスニックな面を持っている。ジムノペディ3曲を聞いていただくときサティの音楽の本質がよく分る。私共がレコード・アルバムで取り上げたのは勿論この顔のサティなのだが、その中にサティの第三の顔とも言うべき三曲のキャバレーソングを取り上げた。キャフエ・コンセルと呼ばれるこの歌は「TENDREMENT (とろけるように)」、DIVADEL'EMPIRE (エンパイア劇場の歌姫)」、JE TE VEUX (あなたが欲しいの)の三曲だが、これは数あるフレンチシャンソンの中でも最も美しい曲の中に属している。この歌が白馬野外音楽祭には誠にぴったりであったのは当然のこととは言え、とても嬉しかった。デンオンからは今をときめく坂本龍一さんがプロデュサーになって作ったダンスリーのアルバムが一枚出ている。「THE END OF ASIA」(アジアの涯にて)というのがそれだがこのタイトル曲も野外音楽祭には実にぴったりだった。龍一さん特有のノリの良い16ビートのリズムに日本ぽいかなりエスニックな旋律がからむ、そして最後には単旋律で詠歌が流れる、天才坂本龍一の面目躍如というところだ。龍一さんとダンスリーが組んでCD・LPを作ったのは5年前のことだが、不思議なことにこの頃の龍一さんは、まだ現在ほど有名ではなかった。私もこの企画の話が出た年までは龍一さんの名前は全然知らなかった。コロムビアのディレクターからあのYMOで有名な坂本龍一と言われて、ああそうかと納得したのをよく憶えている。私の家へも練習のために何度か足を運んでいたがとてもハニカミ屋で、まだまだ学生っぽい雰囲気を見山に持っていた人だった。それから彼は天才ぶりを発揮してあれよあれよという間に大スターになってしまうが、あの頃は私の家に来るまでの間に女の子に取り囲まれてしまったという話も聞かなくなったように思う。

ともあれ、すかつとした夏の野外音楽祭にはサティと龍一がよく似合う。

作家と語る

対談シリーズ(1)

吉村由美

〔エッセイスト〕

陳舜臣と神戸



★神戸の町には

シャレた推理小説が似合う

吉村 陳先生の処女作「枯草の根」は、昭和三十六年に江戸川乱歩賞を受賞されましたが、この作品の魅力は、主人公の陶展文のキャラクターにあると思います。モデルはどなたかお知り合いの方ですか。

陳 いえ、そうではなくて、私の理想像ですね。僕は身体が小さいので大きい人に憧憬しています(笑)、自分にはないものを持った人物をつくり上げたんです。

吉村 とっても素晴らしいキャラクターですねえ。

陳 そういう素晴らしい人物に私が憧憬しているのです(笑)。

吉村 私も陶展文のキャラクターに憧憬しています(笑)あれだけのキャラクターをまったくの無から創造され

るのですからすごい想像力ですね。でも先生の持つておられるヒューマニティーも当然出ているんでしょうね。陳 こういうものは自分で出そうと思わなくても出てしまうものなんです。絵とか彫刻でもそうですけれど、とくに文章には出て来ると言います。「文は人なり」と言いますからね。

吉村 そうですね。私もそう思います。

陳 だからね、同人雑誌でも合評会をするでしょう。あれはあまりよくないですね。オレはここに引っ掛ったぞと言われると、まずいのかなあと思つて直すでしょう。しかし、そのまずいといわれたところが本当はいいところかも知れない。引っ掛かるということは余計な石ころかも知れないが、根をもった芽かも知れない。それをつみ取ってしまう結果になりかねません。

吉村 先生はまったく同人雑誌とはご縁がなくて…。

陳 ええ、まったく関係なしで。

吉村 すると先生はどうして小説を書こうと思われるようになったのですか。

陳 もともと小説を読むのが好きでした。僕が大阪外国語大学在学中に、テキストにコナン・ドイルの作品を使われた有名な教授がおられた。コナン・ドイルでもシャーロックホームズ物ではなくて、オカルト物なのです。コナン・ドイルの作品には冒険と探偵とオカルトの三つの分野があります。心霊学者としても彼は有名なんですよ。

吉村 そうですか。探偵物ばかりだと思っていました。

陳 あの頃、「新青年」という雑誌がありました。そこに外国の探偵小説が紹介されていたんです。



吉村 先生が「枯草の根」をお書きになった当時、推理小説は今ほど隆盛ではなかったのではないのでしょうか。

陳 いや、その何年か前に松本清張の「点と線」が出まして、その刺激を受けて一斉に推理作家が出た頃です。

清張は何よりも「動機」を重んじた。これによって今までは単なる犯人捜しに終始していた推理小説が、一般の小説に近くなりました。話の展開にも不自然さがなくなり、推理小説が文学の一分野として確立して来たんです。

吉村 純文学として読める作品もありますね。

先生はずっと神戸を舞台に書いていらっしやるので、私たち神戸に住んでいる者にとっては、それだけで、とても心強く感じます。

陳 神戸は小説の舞台としてはなかなかいいですよ。それによく知っているののでいちいち取材しなくていい(笑) 吉村 先生の作品を拝見していますと、さりげない表現のなかに、神戸の町というものがよく見えてまいります。神戸の香りや色が感じられて嬉しくなります(笑)。

陳 神戸はハイカラな町だから、シャレた推理小説の舞台になりそうだと、常々思っていたんですよ。

吉村 「枯草の根」の主人公・陶展文の経営する中華料理店、「桃源亭」のある東南ビルは、海岸通りののたたりをイメージなさったのでしょうか。

陳 まあ、架空のビルですけども。幾つかモデルはあ

るのですが、明海ビルが最もイメージに合いますね。

吉村 多分そうじゃないかと思っておりました。明海ビルは、本当に海岸通りの霧開気に合ってますねえ。私は海岸通りの古いビルがとっても好きなんです。

陳 私も好きですよ。日本郵船のビルもいいですね。

吉村 旧神戸商工会議所の建物が壊されたのは、非常に残念です。「枯草の根」は旧居留地が主な舞台ですが、「弓の部屋」や「柊の館」には異人館が出て来ます。これはどの異人館がモデルなんですか。

陳 「弓の部屋」は相楽園に移築された旧ハッサム邸などを合成したものです。いずれも架空のものです。異人館については小松益喜さんの絵がすごく参考になりますね。その当時の様子がよく分かります。例えば居留地でも、舗道が木レンガの時代があったんです。ところが火事のときに道が燃えてしまった。その木レンガの舗道も小松さんの絵に出て来ます。

吉村 神戸にはレンガ畳とか石畳が昔からあって、今もそれを現代風に復元しているんですね。先生は神戸の町では、どのあたりがお好きですか。

陳 そうですねえ、それぞれ特徴があって捨てがたいですね。ただ北野町は人が多過ぎて困る(笑)。昔は閑静な住宅地だったんですがねえ。

吉村 先生はこれからも神戸を舞台に書きつづけて行かれるわけですね。

陳 ええ、取材しなくてもいいから(笑)。ただ現代を舞台にすると取材し直す必要がありますね。どこがどう変わったか、歩き直してみたいと思っています。

吉村 私もよく取材にまいります。そのときはぜひお連れして下さいませ(笑)。

△にむら珈琲御影店にて▽

陳 健臣／「枯草の根」で江戸川乱歩賞を受賞。その後、「青玉獅子香炉」で直木賞、「玉藻ふたたび」「孔雀の道」で日本推理作家賞、「実録・アヘン戦争」で毎日出版文化賞、「敦煌の旅」で大佛次郎賞など各賞を受賞。直木賞選考委員。

吉村 由美／エッセイストとして活躍中。「魅せられし時のために」(神戸新聞出版センター)、「国語力をつける法」(PHP研究所)やがて『薔薇咲く季節に』(サンケイ出版)などの著作がある。現在、月刊誌にエッセイ「神戸からの手紙」を連載中。大学受験予備校ジュニアス・カレッジ経営。



神戸が結びつけた 「二千一秒物語」

大月雄二郎さん

〔画家〕

稲垣足穂の出世作「一千一秒物語」の68話の中から11点をイメージ化した大月雄二郎さん。懐かしいチョコレイト色の表紙とともにその宇宙的な気配の具象化は、新たな「一千一秒物語」・大月雄二郎の世界を確立している。

——随分凝った本をつくられましたね。

最初に足穂の「一千一秒物語」を銅版画にして一冊の本にしようと考えてから十年以上の月日がたっているんですよ。でも、あの本は僕の苦勞よりも、実際に本をつくりあげた人たち、創文社と須川製本所の方々や僕の友人の西北八島。彼らがいなかったらできなかったでしょうね。例えば本の体裁や紙の種類にしても、50パターンぐらい作っていますし、僕はバリにいて日本で本をつくっているわけだから、その間に手紙の往復はもちろん、電話代などは四、五〇万円になるかなあ……。紙も19世紀のものを紙屋のストックから捜し出してきたりして……。採算は無視して凝るだけ、凝ったんですよ。ただ、型をSPのレコードアルバム風にしたのは、今までにある豪華本のスタイルにすると見る方が非常に気を使って、気楽に見ることができない。もっと絵本のように見てほしい。それで、古いレコードのアルバムを見ていて、フツと思いついたんです。そしてチョコレイト色の表紙は、明治チョコレイトのパッケージをイメージしてつくられたものです。

僕自身は初版本のさし絵を見たことがないのですが、

足穂の娘さんである稲垣都さんが、この本を見て、「難を言えば、ピッタリしすぎていること。まるでこの絵が初版のさし絵のようですね。」と言われたのが、とても嬉しかったですね。

——絵画を志されたのは、いつ頃からですか。

小さい頃から絵を習ったりはしていましたが、特に専門的な教育は受けていないんです。大学も関学の理学部です。ただ義理の兄が山本六三という版画家で、彼に銅版を渡されたのが、きっかけなんです。最初は落書きのようなものから始めていって、それが22歳の時です。でも、すぐにこの道にのめり込んだ訳でもなく、一年半程は役者になるつもりで、状況劇場に在籍していたのですが才能の無さを悟ってやめ、こんどは浄瑠璃をやるうと思っただけですが、これも挫折してしまっただけ(笑)。72年にフランスに渡ってからは、結局たつたひとつ銅版画が自分に残っていたんです。その後ずっと銅版画を続けてこれたのは、版画をしている時の自己の精神状態が自分自身で気もちのよいものだったから、つまり一番集中できるのが版画をしている時だったんです。

——稲垣足穂の「一千一秒物語」を選ばれたのは、何か特別な思い入れがあったのでしょうか。

僕が初めて稲垣足穂の「一千一秒物語」に出会ったのは22歳の時、作家社から出された復刻版で、薄いみず色の表紙の可愛い本でした。全部で六十八の話があったの

1948年神戸生まれ。関西学院大学理
学部卒業後、72年フランスへ。81年
銀座・番町画廊にて初の個展を開く。
86年、限定55部の「一千一秒物語」
にて幻想的な銅版画11点を発表。

ですが、それらを全て銅版画にしたいと思った。丁度、銅版画を始め出した頃で、足穂のひとつひとつの話がまるでモノクロームの版画に見えるようでした。68点の小さな版画集を思い描いて、その計画に夢中になっていったんです。ただ、僕の描こうとしていたのは「一千一秒物語」のさし絵ではなく、68の話をも68の版画としてみようとしていたんです。でも当時は、それらを実現するには、僕自身も未熟で、銅版画のテクニックもじゅうぶんにもっていなかった。その意気込みだけで、

第一話に手をつけることなく渡仏し、七年が経ってしまった。池田満寿夫氏に会ったのは版画の技法も少しは進歩し、作品も大きくなっていったその頃です。それまでエッチングをやっていたのですが、池田さんにドライポイントという技法を教わってから、作品がさらに大きく変わっていきましたね。彼のすすめで東京での個展が実現し、その時、さし絵本のエディションをやらないかという話もちあがったんです。それでフランスに戻るなり、一晚でデッサンし、今回本に収められた十一一点の作品はこの晩のらくがきがもとになっているんですよ。

——そういえば稲垣足穂も関学の出身ですね。

まだ原田の森にあった時のね。僕は上ヶ原ですから、ちよっと違いますけど。同じように「神戸」という街に



53/55

U. o. t. s. u. k. i.

ついても、足穂の感じる神戸と僕の感じている神戸は違っていると思うんです。足穂の神戸はおとぎの国のように美化され、しかも昔のノスタルジアが感じられる。それは全く僕の生きていない世界なんです。神戸の人間なら理解できるのではないか、といういわば自惚れでこの本はつくってしまったところがあるんです。

——今後パリでの活動が主ですか？

パリでの生活はもう15年になるのですが、一番のメリットは外国人でいられる自由があることです。それと人種が様々なので、人間がおもしろいんです。本当にユニークな人やすごいインテリがいたりして……。でも、つきつめればやっぱり理由なく好きだ、ということになるかな。もう第2の故郷という感じがすし。これからは日仏の生活を半々ずつにしようかなと思っています。今は「タバコニスト」(煙草屋、煙草を吸う人)と題する本をつくっています。僕の作品はいずれも主義や主張で成り立っているのではなく、嗜好品のようなものをつくっている、と自負し、またそうありたいと願っているものなんです。だから煙として消えてゆく、上等な紙巻きたばこのようなものをつくりたい。そんな感覚を感じとって下さい。

カット/「一千一秒物語」[街角の衝突]一九八六年